
ミヨッルニル

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミヨッルニル

【Nコード】

N1883F

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

ロキにそのかされて自慢の武器ミヨッルニルを持たずに巨人の国に行くことになったトール。彼はこの危機を乗り越えることができるのか。北欧神話のお話です。

第一章

ミヨツルニル

はじまりはいつものことであつた。雷神トールは呆れたような顔で目の前にいるロキを見ていた。当のロキはその整った顔を悪びれずに平然とさせていた。

「またか」

「ああ、まただよ」

赤い髪に同じく赤い髭で顔中を覆つた大柄な身体で逞しい両腕を組んでいる。そのトールに対して長身の優男で陰のある美男子のロキが述べているのだった。

「悪いか？」

「悪いに決まつている」

無然とした顔でロキに答える。今二人はトールの館であるスルーズヴァンガルのトールの間にいた。そこで向かい合つて話をするのである。

「また巨人に捕まつたとはな」

「連中もものの道理がわかつていない」

「御前が言つな」

トールはすぐにロキに言葉を返した。

「どうせ御前がその巨人の屋敷にでも入り込んで悪戯をしようとしたのだらう」

「わかるか？」

「いつものことだからな」

またトールは言う。

「わからない筈がない」

「それもそうだな」

「しかしだ」

ここでトールはまたロキに言つてきた。やはりトールは腕を組ん

だままでロキは悪びれた様子もない。そんな有様で話を続けていた。
「ゲイルレスだったか」

「うむ、そいつだ」

「そいつは言っていたのだな。俺に屋敷に来て欲しいと」

「そうだ、わしに対して言っただ」

ロキはその時のことをここではありのままトールに対して述べた。

「わしを三ヶ月の間飲まず食わずにさせてな。御前を呼んでくれと」

「三ヶ月か。暫く姿を見ないと思っていれば」

「死ぬかと思っただぞ」

ロキは真顔で述べた。ここではいささか芝居が入っている。

「わしが神でなければ死んでいた」

「一度死んで性根を入れ替えたらどうだ？」

トールの言葉も実に辛辣だった。

「いつもその様なことばかりしているから報いがあつただ」

「やれやれ、手厳しいな」

「自業自得だ。それにしてもだ」

ここでトールは話を戻してきた。

「ただ呼ぶだけか？」

「いや、一つ条件を付け加えてきた」

ロキはトールにまた真顔で述べてきた。

「あんたはミヨッルニルと力帯を持って来ては駄目だそうだ」

「何っ、その二つをか」

「ああ、そうなんだ」

そのことをトールに伝えたのだった。

「客として呼ぶからという理由でな」

「それは嘘ではないのか？」

「ああ、やっぱりわかるか」

「俺でもわかるぞ」

よく単純な神だと言われるトールだ。仲の悪いオーディンなぞはいつもこう言って馬鹿にしている。トールもこのことは自覚してい

てあえて言っただった。

「どうせ俺を招き入れて殺すつもりだろうな」

「わかるか」

「だから俺でもわかる」

トールは答えた。無然とした顔のまま。

「この程度のことはな。しかし客として招くのだな」

「一応はそう言っていたぞ」

ロキは述べた。

「あんたを恐れているな。しかしトールよ」

「何だ？」

「あんたは絶対にその申し出を受けるな」

このことをトールに対して確認するのだった。

「あんたの性格ならな」

「そうだな。それはな」

トールはこのことを否定しなかった。無然としてであるがはつきりと頷いてみせたのだった。

「そのつもりだ。招きに応じるのが俺の性分だ」

「そうだよな。ましてや武器なしでも巨人の国に入ることができるな」

「俺を愚弄するのか？」

馬鹿だのそう言われることは平気だが勇気がないといった類の言葉には反発を覚えるトールだった。今のロキの言葉にはカチンときたのだった。

「そんなことはない」

「では行くな」

「絶対に行く。ミヨッルニルと力帯をなしでな」

「本当にいいんだな、それで」

「俺はオーディンとは違う」

はつきりとオーディンの名前を出した。なお彼の妹のフリッグはオーディンの正妻だ。

「約束は絶対に守る。あんな男とは違う」

「よし、じゃあ話は決まりだな」

ロキはトールの話をここまで聞いて楽しそうに笑って述べた。

第二章

「行くんだな」

「うむ、行こうぞ」

はつきりと頷いてみせた。完全に決意していた。

「是非共な」

「わかった。ではわしも行こうぞ」

ロキもまた名乗り出るのだった。

「同行を呼ぶなどとは言っていないしな」

「むっ、確かにそうだな」

「では問題はあるまい」

「確かに」

トールは今度はロキの言葉に鷹揚に頷いた。

「では頼むぞ」

「わしは杖を持って行こう」

「杖をか」

「御前は何も持って行つてはならぬがわしは違う」

ロキは巧みに相手の言葉の盲点を突いたのだった。

「だからだ。わしはいいのだ」

「用心の為か」

「その通りだ。わしが持って行つてはならんとあるしな。そしてこ

こでだ」

「ここで？今度は何だ」

「御前の従者のシャルヴィも連れて行け」

ロキはこう献策したのだった。

「用心の為にもな」

「用心用心と五月蠅い男だな」

トールはロキの言葉を聞いてその大きな目を顰めさせた。見ればその大きな目からは常に雷が放たれている。流星は雷神であるとい

ったところか。

「全く御前は」

「巨人は馬鹿にはできん」

しかしロキはトールのそのいぶかしみを嗜めてきた。真面目な顔で。

「魔術もかなり使えるのだ。御前と違ってな」

「ふん、痛いところを言う」

実はトールは魔術は不得手である。元々戦いを好み魔術といったものは小細工と馬鹿にしているのである。だからそれでも主神であり妹フリッグの夫でもあるオーデインとは不仲なのだ。オーデインは魔術を誰よりも得意とする神だからだ。

「確かに俺は魔術は嫌いだからな」

「向こうもそれは知っているさ。だから御前さんが巨人の国に乗り込むとなればだ」

「魔術を駆使してくるか」

「そう、それだ」

ロキが言うのはそこだった。言葉が強調されてきていた。

「それでだ。魔術についてはわしが見破って対処する」

「ではシャルヴィは連れて行く必要がないぞ」

「だからだ。話は最後まで聞け」

自分と親身になってトールに対して話すロキであった。

「巨人共が得意なのは魔術だけではないぞ」

「ふむ」

「謀略もだ」

ロキはあえて謀略という言葉を強調してみせたのだった。

「謀略も得意なのだぞ。それはいいのか」

「それなら御前の御家芸だな」

トールは謀略と聞いてジロリとロキの顔を見据えて言ってみせた。

「違うか？」

「つまりそれもわしで何とかなると言いたいのか」

「俺はそう思うがな」

「だからだ。これもまた用心だ」

しかしロキも引き下がらない。また随分と親身かつ強くツールに語る。

「シャルヴィは俊敏だし頭の回転も早い。だからな」

「連れて行くべきだというのだな」

「そういうことだ、わかったな」

「まあいいだろう」

何だかんだでツールも頷くのだった。ロキの言葉に対して。

「それではシャルヴィも連れて行く。三人で乗り込むぞ」

「うむ」

「しかしだ」

話が決まったところでまた言うツールだった。

「ロキ、御前はまた」

「何だ？」

「何か俺に対して色々と世話を焼いてくれるようだな」

ツールが言うのはそこであつた。またいぶかしむ顔になっている。

その顔で今自分の目の前にいるロキに対して語るのである。

「またどうしてだ。御前はオーディンと義兄弟だというのに」

「気紛れだ」

ロキは口の左端を歪めて笑ってみせて述べた。

「気紛れか」

「そうだ。全ては気紛れだ」

口を歪めさせたまま言葉を続ける。

「わしのな。ただそれだけだ」

「それで俺の力になるのか」

「少なくとも御前は一緒にいて面白い」

ロキはこうも言うのだった。

「悪意がないからな。だからだ」

「ふん、少なくともオーディンとは違うぞ」

「オーディンはオーディンで面白い奴だ」

これはさりげなくか計算か。少なくともここでオーディンを庇っているのは事実だった。今度は己の口の右端を歪めさせての言葉である。

「御前とは違った意味でな」

「だからあいつも助けるのか」

「そういうことだ。では行くぞ」

「うむ、ゲイルレズのもとにな」

こうして二人はシャルルヴィを連れて巨人の国に入ることになった。シャルルヴィは小柄ながら俊敏で利発な顔立ちをした少年である。目は水色で髪は綺麗な蜂蜜色だ。トールの従者であり彼の信頼する側近でもある。その彼もまたこの旅に加わったのであった。

第三章

旅がはじまり巨人の国に入って程なくして。トールは己の従者がその手に持っているものが気になりふと彼に対して問うたのだった。
「シャルヴィよ」

「はい？」

「御前は何故そんなものを持っているのだ？」

見れば彼はその手に杖を持っていた。如何にも強靱な櫟の木の杖である。

「これですか」

「そうだ。またどうしてだ？」

「ロキ様に言われまして」

ここで彼は共にいるロキの顔をちらりと見てから主に対して答えたのだった。

「ロキに！？」

「はい、そうなんです」

「おい、ロキ」

トールはここまで話を聞いてそのロキに顔を向けた。

「これも用心というのか」

「そうだと言ったら？」

涼しい顔でトールに返すロキだった。

「用心に過ぎるとでも言うのか？」

「全くだ。確かに俺はミヨッルニルも力帯も持っていない
まずはこれについて言う。」

「だがそれは御前が持っているだろう？ いざという時はだ」
「何度も言うが相手を侮るな」

ロキの言葉が少しけわしいものになる。

「巨人をな。杖でもあれば武器になる」

「武器にか」

「そうだ。わしが奴等にした約束は御前がミヨツルニルと力帯を持つていてはいけない」

ここを強調する。あえて。

「しかし杖を持つなと言ったか？」

「いや」

ロキのその問いに対しては首を横に振るトールだった。その通りである。

「それは言っていないな。一言もな」

「そうだ。まあ持っていないより持っている方がいい」

ロキはそこを強調する。またしても強調だった。

「連中は絶対に仕掛けて来るからな。すぐにもな」

「すぐにか」

「もうすぐ川だ」

ロキは言う。

「もうそこで何かあるかも知れん。気をつける」

「じゃあトール様」

ここでシャルヴィがずっとトールの前に出て来た。そうして彼に対して杖を差し出すのだった。

「これをどうぞ」

「御前も同じ考えか」

「はい」

主の言葉に対して静かに頷いてみせる。

「僕もロキ様と同じ考えです」

「そうか。御前まで言うのならな」

トールもこれで納得するのだった。自分でも気付いていることだが何処かロキに対する警戒があるのは彼のことをよく知っているからだだった。そもそも今回の旅もはじまりも彼が元凶だからだ。

「わかった。それではな」

「御願います。それじゃあ」

「さて」

ロキが二人に声をかけてきた。

「行くぞ。その河だ」

「見たところどうという河ではないな」

幅もそれ程ではないし流れも水量も多くはない。どうということのない河にしか見えないものだった。トールはそれを見てここでは畏はないと思つたのだつた。

「確かここを上にはさかのぼっていったな」

「そうだ。この河だ」

またロキがトールに対して答えたのだつた。

「さかのぼればゲイルレズの館まで一直線だ。行くぞ」

「わかった。それではな」

「うむ」

こうして三人は河のほとりをさかのぼりつつ先に進むことになった。河は至つて穏やかなものであった。しかしここで急にそれが変わるのだつた。

第四章

それまでは至って普通の岸边だった。岩が目立つ荒地の様な場所だ。木はなく岩ばかりが見える。不意に水が前からやって来た。嵐が来たように。

「！？これは一体」

「堤でも決壊したか？」

トールもロキも最初はそう思った。まずはその水を受けるしかなかった。

「いかん、ロキ！シャルヴィ！」

トールは凄まじい勢いの水の中で咄嗟に二人に声をかけた。トールは水の中で踏み止まっている。見れば二人もまた何とか踏み止まっているといったところだった。

「俺に捕まれ！」

「御前にか」

「そうだ。俺が流されるということはない」

これは己に対する絶対の自信があるからこそその言葉だった。

「だからだ。捕まれ」

「わかった。それではな」

「御願います、トール様」

こうして二人は急流の中を泳ぎ何とかトールに近付きその身体を掴んだ。トールは杖をつきその力を借りつつ先に進む。すると河の先の方に一人の巨大な女巨人が見えてきた。黒い髪をしたとてつもなく巨大な女だ。その女がこれまた巨大な水瓶を持っておりその中にある水を河に注ぎ込んでいたのである。ロキはそれを見てトールに囁いた。彼はトールの腰にシャルヴィと共に何とかしがみついている。

「トール」

「何だ？」

「あいつだ」

女巨人に目をやりつつトールに囁いていた。

「あいつが仕掛けている」

「そんなことは見ればわかるが」

「だから話を聞け」

流石にそれはすぐにわかる。無論ロキもそれは承知のことなのだ。彼はさらに言ってきた。

「あいつはギャールプだ」

「ギャールプ？」

「ゲイルレズの娘だ」

そのことをトールに囁くのだった。

「あいつが仕掛けていたのか。成程な」

「ゲイルレズの娘か。ならば」

「そうだ、まずはここでわし等を押し流すつもりだ」

「最初にここで俺達を始末するつもりでか。成程な」

「それで。どうするのだ？」

トールの耳元に口を近寄せてまた囁いてみせた。

「このまま流されるつもりはないな」

「無論だ。まずはあいつを懲らしめるか」

怒りに満ちた目でそのギャールプを見つつ述べる。

「だが。どうすればいいのだ」

「トール様、これを」

ここでシャルヴィが不意に丸く大きいものをトールに差し出した。きた。

「！？これは」

「石です」

見ればその通りだった。どう見ても完全に石である。白く丸い大きな石であった。

「これをあいつに投げればいいかと」

「そうだな。まだミヨッルニルを使う時ではないか」

「僕はそう思います」

「わしもだ」

シャルヴィだけでなくロキもそれは止めたのだった。

「切り札はいざという時にまで隠しておくべきだ。いいな」

「わかった。それではな」

「ではトール様」

またシャルヴィが言ってきた。

「この石をお使い下さい」

「わかった。それではな」

「はい」

あらためて石をトールに対して差し出す。トールがそれを受け取るとすぐにそれをギャールプに向かって投げた。石は勢いよく一直線に向かうとそのまま彼女の頭を直撃した。巨人はそれで思いきり倒れ込むと何とか立ち上がりほうほうの体で逃げ去った。しかしトールも無事では済まず石を投げたことによりバランスを崩しロキとシャルヴィを己の身体に掴ませたまま河の流れの中に流されてしまった。

「おい、トール！」

「このままでは僕達！」

「わかつている！」

トールは慌てて自分に声をかけてきた二人に対して応える。しかしその間にも急流の中に流されていく。最早一瞬の躊躇も許されなかった。

咄嗟に上にあったナナカマドの木を掴んだ。その瞬間に力を込めて身体を河から引き上げさせた。無論ロキとシャルヴィも一緒だ。これで何とか助かったのだった。

「何とか助かったな」

「うむ」

河から上がったところでロキがトールに対して応えた。三人は何とか無事だったのだった。シャルヴィも口から水を吐き出しつつ

それでも無事だった。

「どうやらゲイルレズは本気だな」

「ああ、そうだな」

ロキは立ち上がりながらトールの言葉に対して頷いた。

「このまま館に入っても只では済まん」

「予想通りだな」

最早これで驚く一同ではなかった。とりわけロキは冷静な顔であった。

「おそらく中に入っただけにまた仕掛けてくるぞ。覚悟はいいな」

「無論だ。ではいざという時はな」

「その時は待て。いいな」

「ああ、わかった」

まだ切り札を見せないことを確かめ合いその中でまた歩きはじめた。暫くして巨大かつ重層な城を思わせる館が見えてきた。入口には巨人の若い兵士が立っていた。トールは彼に対して雷を思わせる周囲を圧する様な低くそれでいて響き渡る声で告げたのだった。

第五章

「トールだ」

「アース神族のトール神ですね」

「そうだ」

また堂々と答えるのだった。

「招きに応じてやって来た。主のゲイルレズはいるか」

「旦那様はまだです」

「！？おかしいですね」

ここでシャルヴィは顔を曇らせたのだった。

「招いたというのに主が不在なんて」

「シャルヴィ」

だがここでロキが彼に囁いてきた。

「ロキ様」

「今は静かに見ていることだ」

「静かにですか」

「そうだ。すぐにわかる」

そして今度はこう言うのだった。

「すぐにな。今度は何があるのかな」

「じゃあゲイルレズはもう」

「おそろくな。しかもだ」

「しかも？」

「あ奴だけではないだろうな」

館を見据えつつシャルヴィにまた囁いてみせた。

「巨人の兵士達も多くいるぞ。現にこの兵士は前にここで囚われていた時は見ていない」

「それじゃあやっぱり」

「またすぐに仕掛けて来る」

語るその目が光っていた。

「必ずな」

「間違いなく、か」

「そうだ。だからトールよ」

ロキはあからさまに警戒する目でトールを見つつ言葉を続けてみせる。あからさまかつ明らかに危険なものを察しているその目での言葉でだ。

「まだミヨッルニルは出せないにしる注意はしておくのだな」

「そうだな。ここは御前の言う通りにしよう」

「少なくとも御前には悪いことは言わないさ」

さりげない言葉だったが真実の言葉だった。

「それはわかつておいてくれ」

「うむ。では行くぞ」

「はい」

今度はシャルヴィがトールの言葉に頷いた。彼が先頭になりその後ろに二人の神が続く。この並びで門に行き挨拶をする。三人が案内されたのは山羊小屋だった。ロキは小屋に入り枯れ草の中に寝そべる山羊達を見つつ顔を顰めさせていた。小屋は非常に汚れ匂いもきつい。およそ客、しかも神々を案内するにはあまりにも失礼な場所であるのは明らかであった。彼が顔を顰めさせているのはだからである。

「まさかこんなところに案内するとはな

「?どうかしたのか」

顔を顰めさせるロキに対してトールは平気なものであった。見ればシャルヴィもだ。

「ここが」

「何も感じないのか」

「いいことではないか」

トールは平気な顔でロキに言葉を返すだけだった。あちこちが壊れている粗末な小屋の中にあっても至って平気な顔をしているのである。

「山羊小屋とは。気が利いている」

「気が利いている！？」

「山羊だぞ」

首を傾げさせるロキに対して陽気な声をかけてみせた。

「有り難いではないか。違うか」

「！？ああ、そうか」

ここでロキはようやく気付いたのだった。

「そうだったな。御前にとってはそうだ」

「山羊はいい」

トールは満足そうに微笑んで言う。

「俺は山羊達の場合にいれば落ち着く。だから何の不安もない」

「そうだったな。御前はそうだな」

ロキの顔も落ち着いたものになっていた・その顔でまたトールに述べる。

「山羊は御前の獣だからな」

「そういうことだ。さて」

ここでトールは部屋の中央に椅子を見つけた。古い小屋の中にあるとは思えないかなり頑丈そうな大きな椅子であった。トールが乗るのに相応しいものであると言えた。

「少し休むとするか。少し疲れたしな」

「そうだな。ではシャルヴィ」

「はい」

ここでロキはシャルヴィに声をかけた。彼もそれに応える。

「わし等も休むか。椅子を出すぞ」

「ありがとうございます」

ロキは魔術で二つの椅子を出しシャルヴィと共に座った。二人が座るともうトールは既にその大きく頑丈な椅子に座っていた。しかしここで異変が起こったのだった。

「むっ、これは」

「奴等また」

トールとロキは同じものを見てそれぞれ声をあげたのだった。

「仕掛けて来たか。だがこれはどうということだ」

「ロキ様、これは一体」

シャルヴィも同じものを見ていた。驚きを隠せない顔でロキに問う。

「どういうことですか！？魔術でしょうか」

「間違いない」

ロキは今日の前で起こっているものを見つつ彼に答える。見ればトールが座っているその椅子が自然と宙にあがっていた。そしてそのまま天井に向かっていたのだ。

「奴等、このままトールを天井にぶつけて殺すつもりだな」

「まさかここでも仕掛けて来るなんて」

「やはりな」

ここではシャルヴィとロキの差が出た。策略を苦手とするトールの従者と歴戦の策略家で神々きつての悪戯者である炎の神の差が。だがどうやって仕掛けているのだ」

「わかりませんか？」

「トール、まずは踏ん張れ」

咄嗟にトールにこう伝えるのだった。

「今はな。いいな」

「うむ、わかった！」

トールもそれに応える。そしてすんでのところで天井に両手をついた。それでまずは踏ん張り危機を脱したのであった。

しかしまだ突き上げは来ている。トールはその自慢の怪力で踏ん張ってはいる。しかし危ないのもた事実で油断はできなかった。

第六章

シャルヴィの焦りはさらに高まる。それで青い顔でロキに問うのだった。

「本当にわからないんですか!？」

「だから待て」

トールと椅子を見据えつつそのシャルヴィに答える。

「何の魔術だ、これは」

「それさえわかればですね」

「そうだ。よくあるのは姿を消したり遠隔操作だが」

「己が知っている魔術について考えだした。」

「今回は何かだな」

「姿をですか」

「そうだ。魔術では基礎の基礎だ」

「ロキもまた得意としている。だからこそその言葉だった。」

「だからこそよく使われるのだが」

「見破る方法がありますか？」

「基礎の基礎だ」

「そこをあえて強調してみせた。」

「これだけ言えばわかるな」

「じゃあ簡単にわかるんですね」

「シャルヴィ」

「ここであらためてシャルヴィの名前を呼んだ。」

「はい？」

「とりあえず椅子の下を剣で払え」

「剣ですか」

「そうだ。わしの予想が正しければだ」

「椅子の下を見つつの言葉だった。何も見えないそこを。」

「対処の仕方がわかる。すぐに斬れ、いいな」

「はい、それでは」

ロキの言葉に応えてすぐに動いた。さつと前に出ると剣を横に払った。すると。

その剣が弾き返された。それはまるで石を叩いたかの様であった。

「！？これは一体」

「やはりな」

驚くシャルヴィイに対してロキは冷静なものだった。

「そこにいたか。姿はそこだったか」

「そこ！？それじゃあ」

「そうだ、わしの予想通りだ」

自信に満ちた笑みを浮かべつつの言葉だった。

「そこに奴等はいる。ツールよ」

今度はツールに声をかけた。見れば彼はまだ天井で両手を踏ん張っている。

「杖だ、杖を使え」

「杖をだと！？」

「そうだ、杖だ」

それをツールに言うのであった。声が急かすものになっている。

「その両手で杖を持ち天井を突け、いいな」

「だがそれでは天井を突き破るぞ」

「そうなればそれはそれでいい」

そうした事態も既に考慮に入れた言葉であるのがわかる。今ロキはその自慢の智謀を存分に使っていた。この辺りが流石であると言えた。

「だがわしが考えている通りにいけば」

「その時はどうなる？」

「それで終わりだ」

ロキはツールに対して断言してみせた。

「御前の勝利でな」

「随分と俺を信頼しているのだな」

「少なくとも負ける男ではないと思っている」

「ここでも不敵に笑ってみせての言葉であつた。」

「そう簡単にはな」

「面白い。それではだ」

「突け」

杖で天井を突くように告げた。

「それで防げ。よいな」

「うむ！」

ロキの言葉に従い実際に杖を天井に突き出した。すると椅子の動きが止まった。

トールはそれで終わらなかった。全身に力を込めて踏ん張った。

椅子を両足で踏んでさえた。するとその足元から。激しい音と女の叫び声が聞こえたのだつた。

「女の声！？」

「やはりな」

怪訝な顔をするシャルヴィに対してロキはまたしても納得した顔であつた。

「姿を消していたのだな」

「ロキ様の予想通りですか」

「そつだ。そして見よ」

シャルヴィに対して見るように言う。

「足元をな。そこにあるのは」

「なっ、あれは」

降り立ったトールの足元に二人の女が倒れていた。そのあまりもの大柄さから彼女達もまた巨人であることがわかる。とりわけそのうちの一人は。

「あの女は」

「河にいた女か」

「そつだ」

ロキはその女を見下ろすトールに述べた。

「ギヤールプ。やはりこいつだったか」

「ゲイルレスの娘がまたか」

「もう一人もだ」

ロキはまたトールに告げた。

「この女の名はグレイプ」

「グレイプ？」

「この女もまたゲイルレスの娘だ。二人でここで御前を倒すつもりだったようだな」

「ふん、小細工ばかりしおって」

トールは既に事切れている女巨人達を見下ろしつつ言い捨てた。

「今度は何をするつもりだ」

「今度はゲイルレス自身が仕掛けて来るだろうな」

ロキはこう予想を立ててきた。

「娘達を倒されたうえはな」

「そうか。ではこちらにも本気で行くでしょう」

「トール様」

シャルヴィがトールの側に来て彼に声をかけてきた。

「どうした、シャルヴィ」

「ミヨツルニルと力帯は持っていますから」

緊張に満ちた顔でトールに告げるのだった。

「御安心を」

「いざという時はか」

「はい」

またしても真剣な顔で答えてきた。

「ですから行きましょう」

「出す時は今ではないがな」

ロキはここでは二人、とりわけトールの血気を静かにさせた。

「あくまでいざという時だ。いいな」

「ゲイルレスが何かした時か」

「そうだ。しかもだ」

「しかも」

「手袋は持つて来ているな」

一応念押しのようにツールに尋ねてきた。

「あの鉄の手袋は」

「うむ」

Toolの持ち物の一つである。ミヨッルニルを持つ時に常にはめて
いるものだ。当然今回もそれを持つて来ているというわけなのだ。

第七章

「あれについては何も言われていないしな」

「そうだ。持って来て正解だったぞ」

「用心の時にはめておけというわけか」

「そういうことだ。いいな」

「うむ、貴様の言う通りだ」

ロキの言葉に納得して頷いた。

「では今からはめておこう」

「それがいい。さて」

ロキはここで一旦言葉を止めた。

「来るぞ」

「そうだな。丁度いいタイミングだ」

ここで巨人族の兵士が一人来た。まずはギヤールプとグレイプの亡骸を一瞥したうえで表情を見せずにトール達に顔を向けてきた。

「お待たせしました。宴の用意ができました」

「宴のか」

「はい、こちらです」

表面上は紳士的にトール達に接していた。だが時折ギヤールプ達を見てそのうえで激しい怒りをその目に見せていることからそれが仮面に過ぎないことがわかる。それはトール達も承知であった。

だがそれはお互い隠して招きに応じる。巨大な館の門は櫛の木のものだった。それを潜るとそこにあるのはこれまた巨大な宴の間であった。木をそのまま使った柱が何本も並んでいる。そこに多くの巨人達がいた。そしてその中央にいるとりわけ大柄で濃い黒い髭を持つ男こそは。

「ようこそ、トールよ」

彼は笑顔でトールに声をかけてきた。

「わしがこの館の主ゲイルレズだ。話は聞いているな」

「如何にも」

にこりともせずゲイルレズに対して応える。その左右にはロキとシャルルヴィがいる。二人は時折周囲の巨人達を見つつツールを守っていた。

「一応はな」

「わしは御主のことをよく知っている」

ゲイルレズは笑顔だ。しかしすぐにその目が笑っていないことがわかる。それどころか怒気さえ見せていた。

「まずは娘達の粗相を詫びよう」

この言葉には明らかな怒気があった。それは周りの巨人達も同じだった。

「迷惑をかけたな」

「氣にしているはない」

それについてはあえて言わないツールだった。

「だから御前も言うことはない」

「そうか。それでだ」

「それで？」

ここで話が動いた。というよりはゲイルレズがいささか強引に動かしてきたと言える。

「実はわが館には一つ掟があつてな」

「掟だと」

「左様」

「来たぞ」

ロキはそつとツールに耳打ちした。

「氣をつける」

「わかった」

小声でロキに頷く。そのうえで再びゲイルレズとのやり取りに入るのだった。二人の言葉が続けられる。

「主からの贈り物は必ず受けなければならんだ」

「贈り物か」

「左様」

ここでゲイルレスの目が光った。さつと横に跳ぶとそこにあつた暖炉に手を入れる。そしてそこから真つ赤に焼けた大きく長い鉄の棒を取り出すとトールに対して投げつけたのだった。

「受けよトール！」

今度は殺気を露わにさせていた。

「わしの贈り物、受け取ることができればだな！」

「トール！」

「トール様！」

ロキもシャルヴィも叫ばずにはいらなかった。その赤い某は紅蓮の炎と化してトールに向かつていたからだ。それを受ければトールとて無事では済まないの是一目瞭然だった。

しかしトールはそれを見ても微動だにしない。構えもしない。そこに棒が来たところであった。

「なっ！？」

「まさか！」

何とトールはその棒を右手で掴み取ったのだ。その鉄の手袋で以つて。彼ならではの恐るべき芸当だった。瞬き一つせずにそれをやってのけたのだ。

「まさか掴み取るとは」

「何ということだ」

「これが雷神なのか」

「ゲイルレスよ」

トールはその棒を己の方に手繰り寄せつつゲイルレスに声をかけた。その恐ろしい顔が紅蓮の炎に照らし出されさらに凄みのあるものに見せていた。

「面白い贈りものだな」

「くっ……」

ゲイルレスは怯えていた。既にここで勝敗は明らかだった。

「今度は俺からの返礼だな」

「返礼だと」

「そうだ」

その凄みのある笑みでの言葉だった。

「受け取るがいい。この棒をな！」

「ゲイルレズ様！」

トールが棒を渾身の力で投げようとしたところで彼の家臣が声をかけた。

「早く逃げられよ！」

「そこに！」

別の家臣が指差したのは館の柱の裏だった。

「そこにお隠れ下さい！」

「あそこならば！」

「う、うむ！」

ゲイルレズも必死だった。隠れなければ命がない。それを察した彼は慌ててその柱の裏に隠れた。しかしトールは棒を放ったのだった。

「無駄だ、そんなことをしてもな」

「その柱ならな」

巨人達は今のトールの行動をまずは嘲笑った、

「棒も突き抜けることはできん」

「雷神も愚かなことよ」

「愚かかどうか」

だがトールは不敵に立ち巨人達のその声を聞いていた。

「よく見ておくのだ。今な」

「ふん、無理だ」

「そんなことをしてもな」

その間にも棒は突き進む。紅蓮の光と凄まじい唸り声をあげて迫る。そして遂には。鉄の棒は柱を貫き通してしまったのだった。

轟音が館を支配し絶叫が木霊した。棒は柱を完全に貫きゲイルレズの身体に突き刺さっていたのだ。その顔を苦悶の色が覆っていた。

「馬鹿な、まさか」

「そのまさかだ」

紅蓮の炎に身体を支配されていくゲイルレズに対して述べた言葉だった。

「貴様は俺を侮った。その結果がこれだ」

「侮った………確かにな」

身体はもう完全に炎に包まれている。彼はそこでそのことを悟ったのだった。

「わしは貴様の力を軽く見ていたようだ」

「そうだ」

ゲイルレズに対して答えたのだった。

「だからこそ敗北したのだ。覚えておけ」

「無念………」

これが彼の最期の言葉だった。炎に包まれゆつくりと身体を倒れていく。そうしてその中で事切れてしまったのだった。ゲイルレズの最期だった。

しかしこれで話は終わりではなかった。主を倒された巨人達がいきり立って声をあげるのだった。

「おのれ、よくも！」

「雷神め！」

それぞれ剣や槍を手にしている。それで何をしようというのは言うまでもなかった。

「ゲイルレズ様の仇！」

「生きて帰れると思うな！」

「さて、ツールよ」

ここでロキが悠然としてツールの横にやって来た。シャルルヴィも一緒である。

「ここだぞ」

「そうか、遂にだな」

「ツール様」

シャルルヴィはにこりと微笑んでトールの顔を見上げてきた。

「ではいよいよ」

「頼むぞ」

「あいつはミヨッルニルを持って来てはいない」

「力帯もな」

巨人達はそう思っていた。そもそもこれが彼等の策略だから当然である。トールがどういった性格か把握して仕掛けているのだ。

第八章

「ならば極端まで恐れることはない」

「この数なら」

「果たしてそうか」

その彼等に対してトールは言ってみせたのだった。

「貴様等は言つたな」

「！？何をだ」

「俺は確かにミヨツルニルも力帯も持つて来てはいない」

「それはわかつている」

「そもそもそれが狙いなのだからな」

巨人達の笑みが誇らしげなものになったのだった。

「それならば我等とて」

「ここで神々の中で最強である貴様を倒せば」

「俺は持つてはいない」

ここではいささか言葉遊びになっていた。

「！？何が言いたい」

「貴様が持つていないのはわかっているのだが」

「だからだ」

彼はさらに言う。

「この者は違うぞ」

「ロキか？いや、違うな」

「その小僧は」

シャルルヴィが誇らしげに笑っていた。それは彼等からもわかった。

「トール様、今！」

「よし！」

その小僧が叫んだ。そして取り出したのは。

ミヨツルニルと力帯だった。その二つを天高く放り投げる。する

とトールはそれを右手を高々と掲げて受け取った。後はもう彼の思うがままだった。

帯を締めてミヨツルニルを握り締めた。そしてそのミヨツルニルを縦横無尽に振るい巨人達を薙ぎ倒していく。僅か数刻の間に巨人達の戦士は一人残らず倒され館は先程のゲイルズを焼いた炎により燃え上がってしまった。トール達三人はその燃え上がる有様を離れた場所から見ていた。

「終わったな」

「うむ」

トールはロキの言葉に頷いていた。無論シャルヴィも一緒である。

「終わってみれば呆気無かったな」

「確かに。しかしだ」

「だがここでロキは言うのだった。

「また随分と命の危険を伴う旅だったな」

「待て、ロキ」

「!？」

トールは今のロキの言葉に突っ込みを入れてきた。

「そもそもはだ。御前が原因ではないか」

「わしが」

「そうであろう。御前があゝの巨人に捕まり俺が招かれたのではないか」

「如何にも」

ロキは平然とした態度でそれを認めた。

「わしが捕まったせいだ」

「元はといえば貴様のせいではないか」

そのロキを咎める顔と声になっていた。目には怒りの雷が宿っている。

「それをどうして。そうまで平然と」

「それはそれ、これはこれだ」

だがそれでもロキの態度は変わらないのだった。ふてぶてしさがそこには満ちていた。

「確かにわしはこの話の元凶だ」

「わかつているではないか」

「しかしだ。結果はどうだ？」

彼は結果という言葉を出してみせた。

「結果は。それはどうなのだ」

「俺はあのゲイルズを倒した」

「トールもまたその結果を認めた。」

「そして多くの巨人族を倒した」

「素晴らしい冒険でしたね」

「シャルヴィも言ってきた。彼は笑顔だった。」

「終わってみると」

「確かに。それはな」

「トールは今度はシャルヴィのその言葉に対して頷いたのだった。」

「終わってみると実に楽しい」

「それだ。結果が全てだ」

「ロキはここぞとばかりに勝ち誇ってトールに対して告げた。」

「結果がな。だからだ」

「それでよしというのだな」

「如何にも」

「また勝ち誇った笑みをトールに見せた。」

「少なくとも御前の勇名をさらに上げることになったぞ」

「それもそうか」

「そういうことだ。だからいいではないか」

「あくまでこう言うロキであった。」

「それでな」

「全く。御前はいつもいつも」

「ロキのこのお調子者ぶりと口の上手さについてはトールもよく知っていた。何しろその一番の被害者は彼であるからこれも当然のこ

とであった。

「どうしてそうなのだ」

「わしはわしだ」

またしても居直りの言葉だった。

「それ以外の何者でもないぞ」

「まだ言うか。まあいい」

「いいのだな」

「言っても無駄だ」

これは諦めだった。もうロキには何を言っても変わらない男であるということもトールはよくわかっていたのだ。もっともわかっていて付き合っているのだが。

「御前にはな」

「そういうことか」

「帰るぞ」

これ以上の話は無駄と悟ってロキに告げた。

「それでいいな」

「うむ。これ以上ここにおいても何の意味もない」

ロキも今度はトールの言葉に素直に頷いてみせた。

「帰るとしよう」

「シャルヴィ」

今度は己の従者に声をかけた。

「御前もそれでいいな」

「僕はそれで」

彼には異論はなかった。

「トール様がそう言われるのなら」

「そうか。ならばだ」

彼の言葉も聞いたうえでその右手にあるミヨッルニルを高々と掲げたのだった。

「最後に。これを撃って帰るぞ」

ミヨッルニルを振り下ろすと雷が落ちた。それは燃え上がるゲイ

ルレズの館に落ちそれを粉々に砕いてしまった。ツール達はその光景を見届けると踵を返しその場を後にした。後には砕け散り燃え上がる館があるだけだった。それは静かに燃え尽き廃墟となり後には何も残さなかった。

ミヨツルニル 完

2008・8・8

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1883f/>

ミヨッルニル

2010年10月8日15時04分発行